令和６年１１月１３日

令和６年度　第２回学校運営協議会

１　開会の言葉

２　校長あいさつ

３　協　　議

（１）本校の教育活動について

〇最近の生徒たちの活動状況について

（２）全国および埼玉県学力・学習状況調査の結果について

（３）意見交換・熟議

・各委員より　（気になる点、課題となっている点など）

（４）その他

４　連　　絡　　今後の学校運営協議会日程

第３回　令和７年　２月　　７日（ 金 ）　　午前　９ 時３０分から

第４回　令和７年　３月　２７日（ 木 ）　　午後　３ 時３０分から

５　閉会の言葉

学校だより

9月号　令和６年７月１６日発行

朝霞市立朝霞第一中学校
〒351-0013朝霞市膝折２－３１
TEL：０４８－４６１－００７６
FAX：０４８－４６７－４７４１
E-mail：1chuu@asaka-c.ed.jp

目指す学校像　希望を胸に未来へ前進する学校

嚢中の錐（のうちゅうのきり）

校長　唐松　善人

もうすぐ、令和６年度第１学期終業式を迎えます。今学期、本校の生徒は、学習面においても、生活面においても多くの成長をすることができました。御家庭におかれましても、結果だけではなく、生徒が真剣に取り組んだ過程を認め、褒めていただけたら幸いです。

さて、先日、経営雑誌を読んでいたところ、ある企業経営者の方が、「嚢中の錐」という言葉を御自身の座右の銘として紹介されていました。「嚢（のう）」とは、「閉じ口のある布製の袋」のことです。このことから、「嚢中」とは、「袋の中」ということを意味します。また、「錐（きり）」とは、物に穴をあけるための工具のことです。

すなわち、「嚢中の錐」とは、先の尖った錐を袋の中に入れると自然に袋の外に尖った刃先が突き出るように、優れた才能は自然と外に現れ、真価が発揮されるものだということを意味します。なお、「嚢中の錐」という言葉は、中国の歴史書である「史記」にその由来が記述されております。

この言葉を座右の銘にされていた方は、御自身が職場で冷遇されていた（いわゆる左遷されていた）時期があったのだそうです。その時期には、会社に不満を持ち、自分自身の気持ちも腐りかけていました。そうした時期に、この「嚢中の錐」という言葉に出会いました。

自分に本当に力があるのなら、先の尖った錐のごとく袋を打ち破れるはずだ。しかし、今の自分は、過去の業績に満足してしまった結果、先が丸まってしまった錐になってしまったのではないか。今やるべきことは、会社に不満を言うことでも、ふて腐れることでもなく、自分の錐を磨くことだ。そうすれば必ず袋（現在の状況）を打ち破れる。そう考えて日々の仕事に全力で取り組み、現在の地位を築かれたとのことでした。

私自身も含め、人は物事がうまくいかないときに、環境を嘆いたり、他人を責めたりしてしまうことが多いものかもしれません。しかし、そうした時期にこそ、自分自身が今できることを確実に実践することが大切なのではないでしょうか。企業経営者の方の話を読んで、私自身、多くのことを学び続けたいという気持ちになりました。

朝霞 学校だより

１０月号　令和６年９月１９日発行

朝霞市立朝霞第一中学校
〒351-0013朝霞市膝折２－３１
TEL：０４８－４６１－００７６
FAX：０４８－４６７－４７４１
E-mail：1chuu@asaka-c.ed.jp

目指す学校像　希望を胸に未来へ前進する学校

考え方の癖

校長　唐松　善人

以前、あるタクシー会社を経営する社長さんの話を伺う機会がありました。その会社では、職場での人間関係を円滑に進めたり、楽しく仕事に取り組んだりできるように、職員研修に様々な工夫を取り入れていました。

その職員研修の一環として、「考え方の癖を変える」という研修を行ったのだそうです。社長さんの話によれば、タクシードライバーの多くの人が、お客さんが少なかった一日を振り返って「今日はついていなかった」「今日はイベントがなかったので仕方がない」と業務日誌に書くのだそうです。確かに、お客さんの多い少ないは、天候やイベントなどの要因に左右されることが多いのかも知れません。

しかし、トップクラスの成績を収めているタクシードライバーは、このようには考えません。成績のよいタクシードライバーは、本当の仕事の時間は、お客さんを乗せている時間だけではなく、お客さんを乗せていない「空の状態」のときにもあると考えるのだそうです。天気予報やイベント終了時刻、電車の到着時刻、他社のタクシーの配車状況などを事前に頭の中に入れ、どの時間にどの場所に行けばお客さんを乗せることができるのかを常に考えています。他人や環境のせいにしているだけでは、自分自身の売り上げを伸ばすことはできないと分かっているからです。

これらのことは、考え方の癖といえます。考え方の癖には、「自分自身が向上しようと前向きに考える癖」と「他人や環境のせいにして考える癖」があります。タクシードライバーの例でいえば、お客さんを乗せていない状態、つまり他人から見れば不遇な状況でも、その時期を次に備える準備の時期と考える人は、物事を前向きに考えています。一方、自分は運が悪いと考える人は、売り上げが伸ばせないことを他人や環境のせいにしてしまっています。これでは、なかなか自分自身が成長することは難しいといえます。

考え方の癖を変えることで、自分の行動や習慣が変わり、さらには運も変わっていくものではないでしょうか。本校の生徒にも、物事を前向きに考える習慣を中学校時代に身に付けさせることで、成人したときに遭遇するかもしれない困難な出来事を自分の力で解決できるようになって欲しいと考えます。

朝霞第一中学校だより

１１月号　令和６年１０月１５日発行

朝霞市立朝霞第一中学校
〒351-0013朝霞市膝折２－３１
TEL：０４８－４６１－００７６
FAX：０４８－４６７－４７４１
E-mail：1chuu@asaka-c.ed.jp

目指す学校像　希望を胸に未来へ前進する学校

残　心

校長　唐松　善人

「残心」とは、剣道や弓道など武芸の世界に伝わる言葉で「ざんしん」と読みます。下から読むと「こころのこり」となりますが、武芸の世界では一つの動作を終えた後でも緊張を持続する心構えのことを意味します。例えば、剣道では、打ち込んだ後に相手の反撃に備える心の構え、弓道では、矢を射た後の反応を見極める心の構えのことです。

私がかつて中学校の剣道部で顧問をしていて全国大会に出場したとき、開会式の挨拶の中で、この「残心」についての話がありました。その内容は、「残心」とは「相手の反撃に備える」だけではなく、「自分自身が何かをやり遂げた後の相手への心配り」、突き詰めていけば「相手への感謝の心」であるというものでした。この話を聞いて、私は自分自身の視野が狭かったことに気付かされ、物事はこのように前向きに、広い視野で考えるべきものなのだなと反省しました。

さて、中学校では、野球部など校庭で活動する部活動の生徒が、練習が終わった後、「校庭」に向かって一礼をして、「ありがとうございました」と大きな声を出すことがあります。さらには、自分たちが使った校庭を箒やトンボで掃いたりならしたりします。この感謝の心こそ「残心」です。また、吹奏楽部など室内で活動する部活動の生徒も、楽器や用具、活動した部屋を綺麗にして帰ります。この行為も「残心」となります。「残心」があれば、部活動や授業の後に、校庭や体育館の隅にポツンとボールが転がっていたり、学習した教室が汚れていたりということはありません。

本校の話になりますが、私は、放課後、誰もいなくなった各教室を巡回しています。すると、きちんと机が揃えられ、黒板が綺麗に掃除され、窓の施錠がしっかりとされている学級が多くあります。担任の教師や学級の生徒の「残心」を感じ取ることができます。「残心」は、起こした行動（今日一日の教育活動）をより明確にして、次の行動（明日の教育活動）への弾みをつくります。本校では、今後も、この「残心」を大切にして、生徒を成長させていきたいと考えます。

朝霞第一中学校だより

１２月号　令和６年１１月１５日発行

朝霞市立朝霞第一中学校
〒351-0013朝霞市膝折２－３１
TEL：０４８－４６１－００７６
FAX：０４８－４６７－４７４１
E-mail：1chuu@asaka-c.ed.jp

目指す学校像　希望を胸に未来へ前進する学校

心を揃える

校長　唐松　善人

私の高校時代、楽器の演奏を得意とする友人がいました。その友人は高校の吹奏楽部に所属をし、テナーサックスを担当していました。夏のコンクールや文化祭での発表会に向けて、彼が真剣に練習に打ち込んでいる姿を私は今でも覚えています。

吹奏楽は、トランペット、ホルンなどの金管楽器、フルートやクラリネットなどの木管楽器、ティンパニやシンバルなどの打楽器、そして指揮者で構成されています。友人によると、様々な楽器が合わさって一つの曲を作り上げる作業は想像以上に大変なことなのだそうです。

素晴らしい演奏をするためには、一人一人が真剣に練習することが必要不可欠であるということ。さらには、大人数で一つの素晴らしい作品を作り上げるために、全員で意識を合わせて努力をしなければならないとのことでした。

誰か一人でも努力を怠れば、それは聴いている人にも伝わってしまいます。逆に、全員が心を一つに揃えて素敵な作品を作ろうと真剣に頑張っていると、聴いている人に大きな感動を与えることができます。私自身も、彼らの演奏を聴いて、圧倒されたりパワーをもらったりした経験がありました。

さて、本校では、１１月１日（金）に合唱コンクールを実施いたしました。本校の生徒は、練習段階から真剣に取り組んでおり、合唱コンクール当日には、美しい歌声を会場に響かせてくれました。その歌声に、私自身、とても感動しました。

合唱コンクールも、吹奏楽の大会と同じで、生徒全員が心を一つに揃えることが大切です。歌が上手な生徒も、歌が得意でない生徒も、学級での話し合いや練習を通して、心を揃えていく。その過程には、様々なぶつかり合いや葛藤があるかもしれません。それを乗り越えてはじめて、聴いている人の心に訴える、素晴らしい合唱になるのだと思います。

今回の合唱コンクールを通して、本校の生徒は、他の人と意見を調整し合いながら、目標を目指して共に行動する力を身に付けることができたと私は感じています。こうした力は、生徒が実社会に出た際に必要となるものです。本校では、授業や学校行事を通して、生徒にとって、将来、必要となる力の基礎を育んでまいりたいと考えます。